

旭ろうさい病院ニュース

病院情報誌 第 188 号

令和 6 年 10 月 1 日発刊

発行所：旭ろうさい病院

〒488-8585

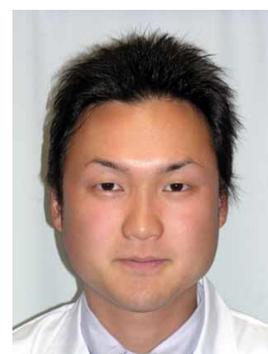
尾張旭市平子町北61番地

TEL 0561-54-3131

FAX 0561-52-2426

好酸球性消化管疾患について

消化器内科部長 松田 大知



好酸球性消化管疾患とは、好酸球の消化管局所への異常な集積から好酸球性炎症が生じ、消化管組織が障害され、機能不全を起こす疾患の総称です。

今回は、日常診療においてなかなか病名がつかない事も多い腹痛や下痢、食欲不振を主訴とする好酸球性消化管疾患について書かせていただきます。

好酸球性消化管疾患は、大きく好酸球性食道炎(EoE)、好酸球性胃腸炎(EGE)に大別されます。

EoEの症状は、嚥下障害、つかえ感、食物嵌頓となります。EoEの診断には食道機能障害に起因する症状である、嚥下障害、つかえ感などの存在、かつ食道粘膜の生検で上皮内に好酸球数15以上/HPFが存在することが必須項目になります。内視鏡所見は特異的で、食道粘膜に縦走溝、輪状の多発収縮輪、狭窄、白斑

などが認められます。治療としては、プロトンポンプ阻害薬が第一選択になります。反応性が不良の場合は局所ステロイドを中心とした薬物療法、原因食物の除去を目的として食事療法、食道の線維性狭窄例に対するバルーン拡張療法がおこなわれます。

EGE は小腸、大腸に好発するため、下痢、腹痛の主訴が多いです。EGE の診断には、症状（腹痛、下痢、嘔吐など）を有すること、胃、小腸、大腸の生検で粘膜内に好酸球主体の炎症細胞浸潤が存在していること、あるいは腹水が存在し、腹水中に多数の好酸球が存在することが必須項目になります。内視鏡所見は、EoE とは違い、浮腫、発赤、びらんなど非特異的とされております。また、一見正常にみえることもあります。さらに、生理的に好酸球浸潤があることがあり、病理組織の診断の解釈には注意が必要です。治療としては、全身性のステロイドが用いられることが多いです。その他食事療法、免疫調整薬、生物学的製剤の投与も行われております。しかし、エビデンスレベルの高い報告がほとんどありません。

食道のつかえ感、嚥下障害を主訴とする方が見えたら、食道がんなど他疾患の鑑別も含め、上部消化管内視鏡検査のご検討をお願いします。

また、EGE に関しては、特徴的な症状に乏しいため鑑別疾患が多岐にわたります。また、内視鏡検査で明らかに異常所見を認めない場合でも生検することにより診断がつく場合があります。

診断に苦慮する場合などお困りの症例がございましたらご紹介いただくと幸いです。



がんゲノム検査について

がん薬物療法看護認定看護師

磯尾 晶子

大腸がんはじめ、各種消化器がんと診断された場合、化学療法を行うことも少なくありません。当院では生検で提出した組織を用い、適切な抗がん剤が選択できるよう遺伝子検査を行っています。古くはイリノテカンに用いられた UGT1A1 (*6*28) ですが、UGT1A1 に遺伝子多型がある場合、重篤な副作用（特に好中球減少）が出現することが知られています。その他にも RAS 遺伝子、MSI (マイクロサテライト不安定性) などの検査を実施しています。これらは「がん遺伝子パネル検査」と呼ばれ、複数のがん関連遺伝子の変化を一度に解析できるため、患者それぞれのがんの特徴を詳しく知ることができます。

まず RAS 遺伝子検査ですが、RAS 遺伝子には KRAS、NRAS、HRAS の 3 種類があり、KRAS 遺伝子の変化は膵がん患者の 95% 以上で確認され、KRAS/NRAS 遺伝子の変異は大腸がんの患者でも確認されています。RAS 遺伝子に変異があると、抗 EGFR 薬（セツキシマブ、パニツムマブなどの分子標的治療薬）の効果が得られないことがあります。そのため、大腸がんの患者では、これらの薬剤を検討する前に RAS 遺伝子の変化を調べ、変異のない患者にのみ使用するようになっています。

次に MSI ですが、MSI-High (高頻度マイクロサテライト不安定性) は胃がん、小腸がん、大腸がん、腎盂・尿管がん、前立腺がん、乳がんなど様々ながん種で確認されています。ゲノムには数個の DNA からなる短い文字列が何度もくりかえす「マイクロサテライト」と呼ばれる部分があります。

MSI-High（高頻度マイクロサテライト不安定性）とは、マイクロサテライトの繰り返し回数に変化が起こった状態です。マイクロサテライトの変化がそのままがんの発生につながるわけではありませんが、MSI-High を示す組織は、がんが発生しやすい状態と考えられています。マイクロサテライトの変化の数と免疫チェックポイント阻害薬（ペムブロリズマブなど）の効果には関係があることがわかっており、マイクロサテライトの状態を調べて免疫チェックポイント阻害薬の効果を調べる遺伝子検査が行われるようになりました。

当院でも近年始まったがんゲノム検査を実施し、がんの原因となった遺伝子の変化でがんを分類し、患者一人ひとりに合わせた治療をめざしています。また、分子標的治療薬、免疫チェックポイント阻害薬にはそれぞれの薬剤により特殊な副作用が出現することがあるため、副作用対策が必須になります。

お困りのことがあればご相談ください。



●地域医療連携室 連絡先●

フリーダイヤル 直通電話 0120-53-6196（平日 8:15~19:00、土曜日 9:00~12:00）

F A X 0120-53-8459